

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。

プライス・コード{a ¥ 1 6 9 0 / A ¥ 1 8 9 0 / B ¥ 2 0 9 0 / C ¥ 2 2 5 0 / D ¥ 2 4 9 0 }

(表示価格は税抜き) 別途消費税が加算されます

www.tambourine-japan.com email: song@tambourine-japan.com

注文方法サイト: <http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm>

[CD/USA {female}] (P14) [CD/CANADA] (P18)

[DVD&CD/USA]

※国内製 DVD プレーヤーで再生可能

- *STEVE EARLE:Live From Austin Tx (DVD) B
- *STEVE EARLE:Live From Austin Tx (CD) A
(2000年11月、Austin City Limits でのライブ。バックは Eric Ambell {ギター}、Kelly Looney {ベース}、Will Rigby {ドラムス}。全15トラックの74分。2008作。New West)

[DVD/USA] NTSC all regions

※国内製 DVD プレーヤーで再生可能

- *BRUCE SPRINGSTEEN:Classic Performance A
(B. Springsteen の初期のベスト・ライブ集。全14曲。1988年/2005年。American Legends)
- *WILLIE NELSON:Willie A
(91年の“The Great Outlaw Valentine Concert” {全14曲} と “Nashville Superstar Concert” {全12曲}。88分。2002作。MVD)
- *TONY JOE WHITE:In Concert A
(92年ドイツのライブ・ハウスでの熱いライブ。全11曲。約60分。ドイツInakustik)
- *EMMYLOU HARRIS:Live In Germany D
(2000年の Spyboy をバックにしたドイツでのライブ。全13曲。2011作。Immortal)
- *JOHN HIATT:Live From Austin Tx A
(開封。1993年のライブ。w. Davey Faragher, Michael Urbano, Michael Ward。全14曲。2005作。New West)
- *STEPHEN STILLS AND MANASAS:The Best Of Musikladen A
(72年のテレビ・ショーのライブ映像。40分。Pioneer)
- *CROSBY, STILLS & NASH:Live In L. A. A
(1982年ロサンゼルスでの New Universal Amphitheater でのライブ。全23曲で80分。2007作。オランダ Immortal)
- *BIG BROTHER AND THE HOLDING COMPANY:Hold Me A
(2007作。Dig Music)
- *ANI DIFRANCO:Trust A
(2004年5月11日&12日の二日間行われた Washington DC のクラブでのライブ。全21曲。2004作。Righteous)
- *BOB DYLAN:Don't Look Back C
(開封。1965年イギリス・ツアーのドキュメンタリー・フィルム。1時間35分。67/99作。Docurama)

[DVD/USA] PAL all regions

※PAL 専用 DVD フォーマットで再生可能

*WILLIE NELSON&LEON RUSSELL: In Concert a
(Paradise Show のライヴ。Leon [ピアノ] と Willie [ギター&ピアノ] のアコースティックなデュエットそして Maria Muldaur&Bonnie Raitt そしてフルバンドの数曲は二人の持ち味がたっぷり楽しめるライヴ。55 分。2005 作。ドイツ All Stars)

*JAMES TAYLOR: In Concert a
(副題 "You've Got A Friend"。バンド付き 18 曲入ライヴ。"Sweet Baby James" から変わらぬ James の温厚な人柄がそのままかつ音楽性もシンプルなのからポップでファンキーなまでのままの温かいライヴ。2004/2005 作。82 分。ドイツ All Stars)

[DVD/USA] NTSC Region 1

※NTSC Region 1 専用 DVD フォーマットで再生可能

*JIM GROCE: Have You Heard - Live A
("You Don't Mess Around With Jim", "Operator", "Bad, Bad Leroy Brown" 他全 15 曲入ライヴ。約 1 時間 10 分。2003 作。Shout)

[DVD-AUDIO/USA]

※国内製 DVD フォーマットで再生可能

*JOHN SEBASTIAN: From The Front Row, Live ¥1000
(全 16 曲入弾き語りライヴ。画像はライヴ映像ではなく、1 曲 1 曲静止映像。2003 作。Silverline)

[VIDEO/USA] 日本の VHS 方式でご覧になれます

*ALLMAN BROTHERS BAND: Live At Great Woods D
(Gregg Allman, Dickey Betts ほかによる Allman の 91 年のライヴ。11 曲。90 分。92 作。Sony)

*STEVE EARLE&THE DUKES: Transcendental Blues Live D
(全 17 曲。70 分。2000 作。E-Squad)

*TROUBADOURS OF FOLK MUSIC D
(93 年 UCLA でのライヴ。Arlo Guthrie, Richie Havens, Beausoleil, John Prine, Janis Ian, Jefferson Starship, Janis Ian, Odetta。54 分。94 作。Rhino)

[CD/USA]

*CHRIS HILLMAN: Bidin' My Time (CD) B
(LP) ¥3090

(Byrds の 1965 年の "Mr. Tambourine Man" 収録の "Bells Of Rhymney" で幕開けする Chris Hillman のソロは、はっきり言って出来過ぎ。プロデューサーの Tom Petty [エグゼクティブは Herb Pedersen] は、昔からの Chris Hillman のファンが望む音楽を良く知っているのだろう。Byrds から始まる Chris Hillman の西海岸ロックな音楽性を実に見事にまとめ上げて、美しく、ポジティブに創り上げている。Byrds の余韻が感じられるサウンドに何度胸キュンさせられたことやら。73 歳 Chris Hillman の不滅のエバーク

リーンな西海岸ロック。本作はあまりに自分の好み過ぎて、いくら褒めちぎっても、褒めたりない。w. H. Pedersen, Roger McGiunn, David Crosby, John Jorgenson, etc. 2017 作。Rounder)

※CD か LP をお知らせ下さい。

*JIM KWESKIN:Unjugged

B

(Jim Kweskin 爺さん、よくぞまあ米国の古い雰囲気の唄ばかりの、それもバンジョーやギターの弾き語りのアルバムを作ってくれました。唄のほとんどは 1900 年代前半の頃の白人黒人の垣根のない民謡。Jim 爺さんは、各民謡の様々な物語に心遊ばせ、一曲一曲を表情を変え、あるときは軽やかに、またあるときはスローに、にこやかにうたう。かと思えばしみじみとして、心に響く唄も。Jim はまるで古謡のレパートリー豊富な心優しい語り部爺さん歌手。Jim 爺さん流のメロディ・フォークの古びた感じがまた何とも言えず味わい深い。Jim 爺さんが客と一緒にうたうのが好きという Donovan の“Colours”で幕。宝物の Jim Kweskin's America と並ぶ宝物。w. Bonnie Dobson, Ben Paley, Tali Trow, Bill Denton。全 15 曲幸せ気分保証。2017 作。Hornbeam)

*MICHAEL McDONALD:Live on Soundstage

¥2690

(CD+DVD のセット。元 Doobie Brothers の Michael McDonald の 2017 年 5 月、シカゴの Soundstage's Grainger Studio でのライブ。ホーンや女性バックグラウンド・シンガー達も加わった大型ロック編成による本作は、Doobie で垣間見せていた彼のゴスペルやソウル・ミュージックの要素の強い音楽が、より強く打ち出されていて、その味わいの深さと彼のヴォーカルのパワフルさに驚かされる。音楽活動歴 45 年の蓄積の上に育まれた堂々たるソロ・ライブ・アルバムだ。Doobie のヒット曲“Sweet Freedom”{ぼくも観客も大きな拍手！}他全 13 曲。2017 作。BMG)

*JEFFREY MARTIN:One Go Around

A

(ポートランドの高校で米文学の教師をし、と同時に SSW としても活動しているという Jeffrey Martin の三枚目。第一印象は Bob Martin! Bob Carpenter! ジョン・スタインベックやアニー・プルーの小説を教材に使っているという彼のスタイルは 70 年代の反骨のフォークや放浪者のフォーク。唄の素材は旅先での経験や見聞きしたことや生徒から聞いたことなどだが、それらの唄は彼の唄の魔法にかかると約半世紀前の米国フォークの、それもコアな匂いを発する物語唄の世界に変わる。バックのエレキギター、ドラムス、スティール・ギター、ヴァイオリン、ベースなどによる腕立つ伴奏は最小限に抑えられていながら、味わい深く、言葉を噛みしめるようにうたう Jeffrey の唄の味わいは一層増している。本当に酔った、酔った。2017 作。Fluff And Gravy)

*ERIC ANDERSEN:Mingle With The Universe

B

(副題“The Worlds Of Lord Byron”イギリスの詩人バイロン男爵 ジョージ・ゴードン・バイロン {1788 年-1824} の詩に Eric Andersen が曲をつけてうたったもの。75 歳の年齢に相応しい晩秋の趣のある声で昔と変わらないアンダースン節。全体的に優しく穏やかな唄が多く、ずっと彼の唄の世界へと引き込まれる。一曲

ワードをフィーチャーしたアラブ風のインスト曲もある。w. Inge Andersen [奥様], Michele Gazich, Giorgio Curcetti, Cheryl Prashker, Paul Zoontjens。2017 作。独 Meyer)

- *OLD SALT UNION:Old Salt Union A
(Old Salt Union は、2014 年の Freshgrass Band コンテストで優勝したという米国中西部を拠点に活動する五太郎のニューグラス～カントリーロック・バンド。印象はコンテストの名称の「フレッシュグラス」がぴったしの若々しさと初々しさと輝き感のある音楽。メンバーの内三名が SSW で、それぞれの持ち唄を土臭くって軽やかなサウンドと軽やかな唄とハーモニーで楽しませる。軽やかなカントリー・ロックのファンには絶好の唄と音楽というか、久々のホームラン・アルバム。不況地帯で生きる彼らは、だからこそ夢や愛を前向きに唄にしていこう。気分爽快作。2017 作。Compass)
- *JAMES LUTHER DICKINSON FEATURING NORTH MISSISSIPPI
ALLSTARS: I'm Just Dead, I'm Not Gone "Lazarus Edition" A
(2009 年に 67 歳で亡くなった James Luther Dickinson が、2006 年 6 月 2 日、息子二人 {Luther&Cody} が主要バンド・メンバーの南部ロック・バンドの North Mississippi Allstars を従えて行ったコンサート・ライブ音源からのスペシャル・エディション版。スワンプの名盤の誉れ高き彼のデビュー・アルバム "Dixie Fried" {1972 年} で出逢ってから、南部音楽一途だった James Luther と彼の音楽を受け継ぐ North Mississippi Allstars とによる、説明不必要な骨太で本醸造な南部ロック～スワンプ。2006 年/2017 作。Memphis International)
- *THE SHOW PONIES:How It All Goes Down A
(Show Ponies は Clayton Cheney {ヴォーカル、ベース} と Andi Carder {ヴォーカル、バズ} の男女のリード・ヴォーカルに Jason Harris {ヴォーカル、ギター}, Philip Glenn {フイドル}, Kevin Brown {ドラムス} を加えた一姫四太郎の、ロスを拠点に活動するルーツロック・バンド。彼らのロックは二人のヴォーカルを含めて、ルーツ色が濃く、また 70 年代のカントリー・ロックのように音楽に活気がみなぎっていて、雑草のようにたくましい。デジタルの時代に対抗するかのような彼らの健やかなルーツロックは、心身を元気にしてくれる。2017 作。Freeman)
- *JACK GRELE:Got Dressed Up To Be Let Down A
(聴くなり馴染んで、すぐに和んでしまった、まるで 70 年代の緩くて人なつっこい唄たち。ヴォーカルの感じは John Prine っぽい。Michael Hurley のような、とぼけた悠長さもあつたり、Jesse Colin Young と彼の仲間達が立ち上げたラクーン・レコーダー派の音楽のような 70 年代の西海岸田舎志向カントリー・ロック風の人びり感もあつたりで、個人的に全くの「好み」。演奏は無名のミュージシャンばかりのカントリー・ロック・バンド編成で、演奏の緩さも魅力。心も体もニコニコ保証。2016 作。Big Muddy)
- *STEINAR ALBRIGTSEN & TOM PACHECO:Big Storm Comin' C
(在庫一枚。1993 作。Rownd Tower Music)
- *STEINAR ALBRIGTSEN & TOM PACHECO:Nobodies B

- (在庫一枚。CD-R。2002年。Norske Gram)
- *MICHAEL STANLEY: The Ride (2013作。Line Level) A
- *TOM RUSSELL: Box Of Visions A
(在庫一枚。在庫期間が長いので開封検品してお送りします。1993作。Stoney Plain)
- *TONY JOE WHITE: Deep Cuts B
(南部男 Tony Joe の最深部から生まれた南部ロック。2008作。Munich)
- *DANIEL MARKHAM: Disintegrator a
(Terry Allen や Flatlanders タイプとの紹介を見て、興味を持ったテキサスの若き SSW の Daniel Markham の新作。期待した兩大物の土臭さや泥臭さは薄い、それよりも R. E. M. タイプの西海岸志向のビタースイートなルーツロックを若者らしく、かっこよくガンガン聴かせていて、いやはや圧巻。Daniel 自身の唄も今が旬の夢の輝きを放っていて、一曲一曲がこだわりの重厚なルーツロック・サウンドと共に、聴き応えたっぷり。不思議と曲が印象的で、ふとしたときに頭の中で彼のうたが鳴っている。2016作。簡易紙ジャケット)
- *THE STATESBORO REVUE: Ramble On Privilege Creek B
(Statesboro Revue は Stewart Mann の南部ロッカーの貫禄たっぴりなヴォーカルをフィーチャーしたルーツロック・バンド。彼らのロックは、70年代の南部志向、特に Capricorn 産のアメリカン・ロックの匂いが充満。無骨というか、荒削りというか、骨太なロックを体現していて、しかも Stewart の入魂のヴォーカルと相まって、聴き応え十分。すべてが70年代のバンドがひょっこり現代に姿を現わしたかのような「音」だ。2013作。Blue Rose)
- *MUSTARD' S RETREAT: 5 Miles Or 50,000 Years A
(1970年代から活動する二人組 [David Tamulevich & Michael Hough] の1990年のライブで発売は1993年作。本作は約半数が二人の心温まるオリジナル曲で、米国フォーク流のストーリーテリングな唄の世界を楽しませる。全14曲。1993作。Mustard' s Retreat / 発売年の古いCDですので、検盤をしてお送りします)
- *PROFESSOR LOUIE AND THE CROWMATIX: Wings On Fire a
(The Band のロック・スピリットを受け継ぐウッドストックのロック・バンドの本作は Rick Danko と Levon Helm に捧げられたもので、そのスピリットは一段と高潔。彼らのロックは Levon Helm のスタイルを基本にニューオリンズ色やロック色を濃くしたもので、そのエネルギーは熱い。ゲスト: John Platania, Michael Falzarano。2012作。Woodstock)
- *RICHARD DOBSON: Here In The Garden ¥1500
(Townes Van Zandt や Guy Clark と共にテキサスのフォーク・ソングを引っ張ってきた Richard Dobson の六枚目。本作は Richard が1999年にドイツをツアーした時に組んだバンドのリーダーの Thomm Jutz をギターと共同プロデューサーで迎えて制作したアルバム。本作は、うたうこと、バンド仲間と音楽することを楽しむかのように、ゆったりとロッキン・カントリーしていて、快適。2013作。Brambus)
- *MIKE LAUREANNO: Pushing Back Wintertime B

(Mike Laureanno は、今は亡き Jack Hardy のハイパートのヴォーカル・ハーモニーのシンガーとして、かれこれ 12 年間、Jack Hardy と活動を共にしてきた SSW。Jack に較べ、Mike の声はやや高めなのだが、押し殺したようなかすれた声まで似ているのだから。Mike は Jack から唄の心を学んだようだ。2013 作。Mike Laureanno)

- *KEITH SYKES: It's About Time (1993 作。Oh Boy) A
- *TOM RUSH: Celebrates 50 Years Of Music D
(CD+DVDセット。Tom Rush の音楽人生 50 周年記念のライヴ。録音は 2012 年 12 月 28 日。DVD を見た。ゲスト [David Bromberg, Jonathan Edwards, Buskin&Batteau, Dom Flemons] 全員集合のもと、Tom Rush の唄 "Hot Tonight" で幕開けした後、ゲストの唄が 7 曲。Tom の出番はその後、8 曲。ひょいっと 70 年代にタイムスリップ。映像で見る Tom は現役バリバリの印象。ボーナスにはインタビュー、リハーサル風景そして David Bromberg の "Tongue" 他 4 曲がライヴで収録されている。CD は DVD 収録曲 16トラックから 13トラックを収録。2013 作。Appleseed)
- *US RAILS: Heartbreak Superstar A
(Tom Gillam, Ben Arnold, Scott Bricklin, Matt Muir, Joseph Parsons の誰もがヴォーカルを担う今日のアメリカン・ロック・シーンで、最も愛すべきバンドのひとつ、US Rail の新作。70 年代の主に西海岸のロック・バンドが保持していたアメリカン・ロックの土臭さや泥臭さを濃縮したロックは、昔どこかで聴いたことがあるようなヴォーカルやサウンドで、体にすこぶる美味しい。バンドの連中皆が、昔のロックに夢を馳せて、夢を追っかけてロックしているような素敵なロックだ。2013 作。Blue Rose)
- *THE DIRTY GUV' NAHS
: Somewhere Beneath These Southern Skies A
(ナッシュビルのガッツあるルーツ・ロック・バンド。本作は 3 枚目。ナッシュビルと言えば、昔はカントリーのメッカだったが、彼らのロックは南部っぽくて結構気骨があって、真に切なロックを体現する。リード・ヴォーカルの James Trimble の、アメリカン・ロック魂のあるソウルフルなヴォーカルは、骨太なバンド・サウンドと一体となって凄いインパクトがある。Levon Helm Band との共演、そして Levon Helm のスタジオでの録音経験もあるそうだ。ラストの "One Dance Left" では、Levon Helm っぽいヴォーカルを振り絞ってもいる。2013 作。Blue Rose)
- *I SEE HAWKS IN L. A.: Mystery Drug A
(ヘンなグループ名。総勢 8 名編成のこのバンドは、1999 年に LA で結成されたという。バンド編成はアルバムを出すごとに変わっていて、以前のアルバムには Chris Hillman も一員だったことも。唄も音楽も、まるで昔の西海岸の自然派カントリー系ロッカー達のように大らか。音楽を楽しむ空気が伝わってくる。2013 作。Blue Rose)
- *ANDREW CALHOUN: Living Room a
(本作で聴く Andrew の唄は、唄に揺ぎがなく、大きな優しさのようなものが感じられて、Andrew の SSW としての成長というか、円熟味が感じられるもの。自室でアコースティック・ギターを爪弾き、リラックスしてうたう Andrew の数々は、心穏やかにする。w. Casey Calhoun [Andrew の娘さん。素直な唄が気持ち良い]、Tracy Grammer, Jenna Rawling, etc. 2013 作。Waterbug)

- *AD VANDERVEEN:Driven By A Dream B
 (Iain Matthews とのデュオ“Iain Ad Venture”の Ad Vanderveen の本作はところどころ Neil Young with Crazy Horse をもホフツさせる
 思いっきりルーツ回帰&若かりし夢回帰の見事なアメリカン・ルーツ・ロック。至
 福保証。2012 作。Blue Rose)
- *MICHAEL JOHNSON:Moonlit Deja Vu a
 (ミネソタのヴェテランSSW の M. Johnson の 12 年振りの本作は月を眺めながら
 ロマンティックな気分にはほんわかと酔うような感じ。ギター名手でもある寡
 黙だが、星の輝きのある美しいギターを伴奏に、ほのぼとと一人、そ
 して娘の Truly や Maud Hixson 嬢とデュエットで、酔うようにうたう。
 2012 作。Red House)
- *MARK DVORAK:Time Ain't Got Nothin' On Me a
 (フォークギター、ブルースギターのギター演奏にも定評のある M. Dvorak だが、
 曲調により様々な表情を見せる鮮やかなギターの伴奏に乗ってうた
 われる彼の唄は体の芯から暖まる優しい眼差しの穏やかで優しい
 唄。ギターのメリハリがしっかりしているせいか、彼の穏やかな唄の穏や
 かさが引き立つ印象で、ふわふわと極楽な気分になる。ゲスト:
 Michael Smith。2011 作。Waterbug)
- *LONG GONE "Utah Remembers Bruce "Utah" Phillips a
 (70 年~80 年代、Utah Phillips 作の唄をうたう SSW が本当に多かつ
 た。本作は Utah の唄に影響を受けたという SSW の Kate MacLeod が
 Utah の息子の Duncan の協力を得て制作した Utahソング集。Philo が
 存在していたら、Philo が真っ先に企画しそうなアルバムだ。トラックの
 語りと一曲グループの唄以外の 16 曲は全て Utah の唄を愛する SSW に
 よるギター等の弾き{奏き}語り。Kate MacLeod 以外は初耳の SSW ば
 かりなのだが、一曲一曲の「唄」が瑞々しく新鮮。2011 作。Waterbug)
- *MAD BUFFALO:Red and Blue a
 (カントリー・ロックは不滅を実感させるナッシュビルの SSW の Randy Riviere が
 ヴォーカルの Mad Buffalo。カントリー・ロックのスタイルだが、一つ一つの唄は
 Randy の SSW としての持ち味が出ていて、むしろその各曲の個性が
 カントリー・ロック・スタイルの音作りをどこかカントリー・マンのロマンっぽい深みのあ
 るものにしていて、Randy の唄の味わいも深まっている。w. Reggie
 Young, Chad Cromwel {Neil Young Band}, etc. Mad Buffalo)
- *RANDY BURNS:The Simple Things a
 (昔のままの瑞々しい 2008 年作。CD-R。自主制作盤)
- *CARTER BROTHERS:The Road To Roosky a
 (これは気合の入ったブルグラス系カントリー・ロック。カーター・ファミリーの家系の
 Tim&Danny 兄弟の本作はカントリー・ルーツ・ロックの深さが違う。骨太のカトリ
 ー・ロック。w. Sam Bush, Tim O'Brien, Ferrell Stowe。2011 作。Compass)
- *ERIC ANDERSEN:Blue Rain C
 (E. Andersen の本作は闇の中で直向きでブルーかつブルース色濃厚なル
 ウェーでの 2006 年のライヴ。本作の彼は何かに取り憑かれたように凄い。
 2006 作。ルウェー-Blue Mood)
- *ERIC ANDERSEN:Ghosts Upon The Road A
 (88 作。カク Alert Music)
- *BILLY C. FARLOW:You Better Run a

(元 Commander Cody&His Lost Planet Airmen の Billy の本作は重厚な南部ロック。w. Mary-Ann Brandon, Fred James, Jeff Davis, Mark Horn。2011 作。ドイツSPV)

- *GREG BROWN:Freak Flag A
(ブルース、カントリー、フォーク等アメリカン・ミュージックの要素混在で、G. Brown 印の煮込み味 SSWアルバムを創作し続けて彼だが、本作も同じ。この旨みある味わいは彼にしか出せない。w. Bo Ramsey, Mark Knopfler, Richard Bennett, David Mansfield, etc. 2011 作。Yep Roc)
- *GREG BROWN:Dream City B
(副題“Essential Recordings Vol. 2, 1997 - 2006”。1997 - 2006 の間収録の Red House と Trailer の音源からの 16 曲と未発表音源からの 4 曲の二枚組。2009 作。Red House)
- *AZTEC TWO-STEP:Days Of Horses a
(初めて聴いた時、耳を疑った。Rex Fowler&Neal Shulman の Aztec の唄は彼らの 72 年のデビュー作と変わりなく、深緑の若葉のように清々しい。二人によるヴォーカル・ハーモニーの初々しさは彼らならではの。2004 年のカバー。CD-R。Red Engine)
- *RICHIE FURAY:I Am Sure a
(Poco/Richie Furayファンだったら“The Heartbeat Of Love”と同じくらい歓喜の声を上げることに必至のカバーが 2005 年の最高にご機嫌な Richie のソロ。共演者は Chris Hillman, Dan Dugmore, Jimmy Ibbotson, Bob Carpenter, Jeff Hanna, Michael Rhodes, etc. もうこれは出来すぎなくらいな Richie がリード・ヴォーカルの Poco 風カントリー・ロック。全 13 曲。ItsAboutMusic.com)
- *JAMES McMURTRY:Childish Things a
(昨今の Ray Wylie Hubbardクラスの泥臭く、ずっしり重みのあるアメリカン・ロック。ヴォーカルもサウンドも地鳴りがするほど鈍く唸りを立て凄みを放つ凄いロックだ。2005 作。Lightning Rod)
- *STEVE EARLE:Washington Square Serenade B
(CD と DVD のセットの限定盤。DVD は国内プレイヤーで再生可。S. Earle の本作はまるでデヴィンズ・チルドレン的雰囲気、初期 Dylan やそれを通り越してアメリカン・フォーク的土臭さに到達したりもする文字通りアメリカン・ミュージックの根っ子回帰志向アルバム。DVD はニューヨークのスタジオ・ライヴ 3 曲他で 37 分 24 秒。2007 作。New West)
- *PONDEROSA:Moonlight Revival A
(南部アトランタから颯爽とデビューした 4 人組ロック・バンドの Ponderosa は南部魂を持った、若い、今どき珍しく骨のあるアメリカン・ロック・バンドだ。南部系アメリカン・ロック・バンドのヴォーカルとしては理想的な Kalen Nash [男性] のソウルフルなヴォーカルに粘っこいエレキギターと重厚なロックはもう抜群。2011 作。New West)
- *KIP BOARDMAN:The Long Weight a
(音楽的には Harry Nilsson が近いだろうか。唄が自由に散歩でもするかのようにな軽やかで、豊かなイメージが広がる。ヴォーカルは Steve Forbert っぽい。Gia Ciambotti, Claire Holley, Kristin Mooney の女性バック・ヴォーカルを含め、ロック・バンドのサウンドがオール・アメリカン・ミュージックのスケールで巧み、かつ自在で見事。2010 作。Ridiculous)

- *STORYHILL:Shade Of The Tree a
 (自主制作で12枚のアルバムを発表し、2007年にRed Houseから“Storyhill”を発売し、多くのSSWファンを虜にしたChris Cunningham & John Hermansonのヴォーカルデュオ“Storyhill”の本作は、SSWの唄心というか良心が詰まった湧き水のごとき清き逸品。2010作。Red House)
- *JIM POST:Reach Out Together A
 (白髪の爺さんになったJimの声は軽やかで若々しい。Jimの飄々とした唄とMoby GrapeのJerry Millerの歯切れの良いギター、そしてRandy SabienのフィドルとAndy Steilのスライドギターやバンジョーはぴったし噛み合っていて、抜ける青空のような屈託のないJimの唄は最高に輝いている。2009作。Jim Post)
- *GEORGE ENSLE:Build A Bridge A
 (Townes Van Zandtが「George Ensleは最も影響力のある尊敬すべきSSWの一人」と賞賛するテキサスのヴェテランSSWのGeorgeの唄はどことなくJerry Jeff Walkerの風合いなのだが、精神が自由というか飄々としていて、唄に爽やかさが感じられる。Bill Staines的な風合いも。SSWファンの愛聴盤になること請け合い。2008作。Berkalin)
- *MARK STUART:Songs From A Corner Stage(99作。Gearle) A
 *BUTCH HANCOCK:War And Peace A
 (初期Dylanを想起させる彼本来の粗い肌触りの引きずるような唄は流石。抜群の最近作。w. Joe Ely, Jimmie Dale Gilmore, Rob Gjarsoe。2006作。Two Roads)
- *ERIC TAYLOR:The Kerrville Tapes a
 (Kerrville Folk Fesでのライブからの全10曲。全曲ギターの弾き語りだが、鮮やかなアコースティックギターの伴奏とまるでスタジオ録音のような唄うことに集中したEricならではの情景描写が見事な心痺れる叙情的な唄の数々。絶品。2003作。Silverwolf)
- *THE NORMAN FISHINTACKLE CHOIR
 :One Kind Of Bait In The Bucket A
 (72年作“Out The Window”と73年作“Shimmy She Roll, Shimmy She Shake”のJim Pulteがヴォーカルのバンド。昨今のスワップ系アルバムでは最もスワップ色が濃い。ファン感動保証。2007作。Windstorm)
- *DANNY FLOWERS:Tools For The Soul A
 (本作はカントリー調、初期Ry Cooder調、南部ロック調そしてゴスペル調[結構Leon Russellっぽい]等、どれも唄も音楽の魂に触れるもので、一曲一曲アメリカンルーツ色が濃厚で土臭くかつ泥臭い。w. Emmylou Harris, John Cowan, Steve Mackay, etc. 2007作。Brash Music)
- *JIMMY HALL:Rendezvous With The Blues A
 (Johnny Sandlinのプロデュースでアラバマ録音のWet WillieのJ. Hallの本作はティーン・ササな本仕込みブルース。David Hood, Clayton Ivey, Johnny Sandlin, Jack Pearson, Bill Stewart等による伴奏はブルース色濃厚な南部ロック。3ボーナス・トラック付で計14トラック。2006作。Rockin' Camel)
- *TOM MAY:Blue Roads, Red Wine a
 (かれこれ35年以上のキャリアのヴェテランSSWのT. Mayの本作はうたう心優

しい旅人そのままに旅先の思い出の唄や友愛の唄や夢や希望の唄などがそっと優しくうたわれている。Tom のヴォーカルはそっと包み込むように優しい。トウ・トラックが1曲隠されている。ほほえみの一曲。2008 作。Waterbug)

*DAVID MALLETT:Midnight On The Water a
(2005 年夏のライブ。“Pennsylvania Sunrise”時代を思い起こさせる唄声に感激。2006 作。North Road)

*A. J. ROACH:Revelation ¥1500
(ヴァージニアの山奥育ちで伝統音楽を聴き、若い頃古いアパールの聖歌をうたっていたという A. J. だが、彼の唄の芯の部分でカントリーやブルース等白人と黒人のルーツの音楽がミックスされた音楽性を保持し、伝統的聖歌やゴスペルの祈りから発した柔軟で逞しい意志のようなものが感じられる。Great!2007 作。Waterbug)

*TINSLEY ELLIS: Moment Of Truth A
(南部ブルース・ロックの大御所登場。いやはや鳥肌立つブルース・ロックが次から次。エレキギターをかき鳴らし、大地揺らすブルース・ロックを叩き出す。全てが骨太で肉感的。w. Kevin McKendree, The Devil One, Jeff Burch, Mike Lowry, Michelle Malone。2007 作。Alligator)

*ALASTAIR MOOCK: Fortune Street a
(通好みのスルメ味 SSW アルバム。主に鮮やかなギターの伴奏でダミ声でうたう Alastair のざらっとした感触の唄は静かなインパクトがある。Chris Smither の“Train Home”のプロデューサーの David Goodrich のプロデュースは Alasdair の個性を際立たせていて見事。Chris Smither ファン是非。2007 作。オランダ CoraZong)

*RAMSAY MIDWOOD
: Popular Delusions&The Madness Of Cows a
(J. J. Cale 風いぶし銀南部ロック。Produced by Don Heffington [トランスも]。w. Greg Leisz, Randy Weeks, Jake Labotz, David Jackson, etc. 2006 作。Farmwire)

*DAN HICKS&THE HOT LICKS:Featuring An All-star Cast Of Friends ¥2780
(CD と DVD のセット。CD、DVD とも Dan Hicks の 60 歳誕生日お祝いコンサートのライブ。D. Hicks と縁のあるミュージシャンやシンガー総出演の素晴らしいライブ。DVD は PAL でコンサートの前のフィルムから笑わせる。至福保証。CD は全 13 曲で DVD は 2 曲多い 15 曲。2003 作。Surfdog)

*MICHAEL DE JONG: The Great Illusion C
(フランス人 SSW [だが音楽は米国 SSW 系] の Michael [唄は英語] の本作は全曲ギターの弾き語り。一見 Bob Dylan の初期のようなシンプルで唄なのだが、心からの魂震わす唄は素晴らしい。SSW ファン必聴。2006 作。MW)

*MICHAEL DE JONG: Last Chance Romance C
(人のロマンス等がとろけるように深く静かな空気の中で噛み締めるようにゆったりと唄われる。彼独特な独り言そして夢想の世界。2002 作。オランダ Munich)

*TONY ARATA: Such Is Life A
(CD-R。Tony はじっくり練り上げられた極上の唄を響きのいいアコース

ティック・ギターをお伴にゆったり噛み締めるように唄う。シンプルながら唄が深い。理想的 SSWアルバム。w. Dan Dugmore, Pat Alger, Lee Roy Parnell, etc. 2005 作。Little Tybee)

- *TONY ARATA:Way Back When A
(Tony の唄は嬉しくなるほど心優しく心が澄んだ唄、そして音も清々しくてスイートなカントリー・ロック調。丁寧な音作りを含め、一曲一曲に彼の温厚さと誠実さがきっちりと込められていて、心のこもった手作りな作品として全てが温かい。70 年代の良質の SSWアルバムと同じ感触。2000 作。Little Tybee)
- *DAVID MASSENGILL:The Return ¥1050
(倉庫の隅で発見。95 作。Plump)
- *RICHARD MEYER:The Good Life! ¥1050
(倉庫の隅で発見。92 作。Shanachie)
- *TOM OVANS:Tale From The Underground (Great!95 作。NSR) A
- *ROD MacDONALD:A Tale Of Two Americas A
(子の親になった Rod の「唄いたいこと山ほどあり」の思いがガツン伝わってくるフォーク・シンガーの原点回帰の見事なアメリカン・フォーク。2005 作。Wild River)
- *MARK ERELLI:Hillbilly Piggrim A
(M. Erelli の本作は古きカントリー・ミュージック回帰。Mark のカントリーは懐古趣味を超えて、今の新しいアメリカの音楽としての勢いがある。音楽スタイルは古いが音楽新鮮野菜。ゲスト:Erin McKeown。2005 作。Signature)
- *JEFF WILKINSON:Landscapes C
(見聞きした不思議な光景や事件等をざっらとした感触の土臭いサウンドでどっぷり自分のペースで唄う。一曲一曲の自作の唄がタイトル通り Jeff の見聞きし、感じた「風景」のように唄として収まっている。全てが Jeff の時間の流れなのがいい。Brambus)
- *BART DAVENPORT:Maroon Cocoon a
(子供の頃、ヒッピーだった両親のレコード・コレクションを聴き漁ったという彼だが、音楽性は 70 年代の夢想的ブリティッシュ・フォークあるいはソフト・ロック的感触で輝くギターを爪弾き、夢見心地な唄をゆったり描くように唄う。2005 作。Antenna Farm)
- *DAVID BALL:Freewheeler A
(タイトル曲は Jesse Winchester のカバーだが、このカントリー系 SSW の D. Ball の本作はヴォーカルといいサウンドといいカントリー度が深い。ヴォーカルもサウンドも泥臭くエレクトリック。w. Mike Johnson, Kenny Malone, Milton Sledge, Dan Frizsell, etc. 2004 作。Acan)
- *FRED KOLLER:No Song Left To Sell A
(どっしりとした SSWアルバムの傑作。Shel Silverstain との共作集で全 14 曲。2001 作。Gadfly)
- *ERIC TAYLOR:The Kerrville Tapes A
(Kerrville Folk Festival のライブ。2003 作。Silverwolf)
- *J. T. VAN ZANDT・WRECKS BELL B
:Live At The Old Quarter Acoustic Cafe
(マックス・ヴァンザントの息子 J. T. が 8 曲と Wrecks Bell が 9 曲の全 17 曲入ライブ。2004 作。Romeo)

- *THE WOODY'S: Teardrops&Diamonds A
 (Byrds~Every Brothers~Gram Parsons 的全アメリカン・ミュージック・ファン
 の琴線に触れる懐古&郷愁ムードとロックする快樂さと恋する思い等が
 チャームに表出したほんわか気持ちのいいカントリー・ロック。w. Al Perkins,
 Dave Pomeroy, Cam King, Tammy Rogers, Steve Conn, Billy Block,
 etc. 2001 作。Dynamike)
- *CELEBRATION! "Highlights From The 40th Philadelphia
 Folk Festival" A
 (2001 年 8 月 24~26 日に開かれたフェスのライヴ。全 13 曲。出演者は収録
 順に Arlo Guthrie, Laura Love Band, Sonia, Solas, David
 Bromberg, Janis Ian, Richie Havens [All Along The Watchtower],
 Tom Paxton&Anne Hills, Chris Smither, Jimmy Johnson, Laurie
 Lewis, Tom Rush [Driving Wheel!], Judy Collins。2002 作。Sliced
 Bread)
- *RECKLESS JOHNNY WALES: It's Not About The Money A
 (ユーモア、皮肉、悲哀等など人生のひきこもごもをペーパース漂う唄でうた
 う凄く個性的で魅力的な SSW。Randy Newman に似てるが、Reckless
 の方が音楽的に開放感があって豊か。w. Jeff "Skunk" Baxter, Clive
 Gregson, Dave Pomeroy, Brian Willoughby, Cathryn Craig, Pat
 McInerney, Michael Snow, etc. 2003 作。Villa Villa Music)
- *SAYLOR WHITE: Graven Image B
 (風貌は Willie Nelson 風。ヴォーカルは Jerry Jeff 風。どことなく時代
 遅れなおっとりした唄と土臭いサウンドはほのぼのとさせ、またしみ
 じみといい気分させる。ひ
 と一言ひと言思い出に浸り、2003 作。Last Call)
- *BILLY JOE SHAVER: Freedom Child A
 (オールタイム・ファイリングな Billy Joe の本作は自身のルーツ回帰の懐古趣
 味的な一方で、古いカントリーやブルース調の節での Billy のヴォーカルは古臭
 くも輝いている。2003 作。Compadre)
- *DAVE SCHRAMM: Hammer And Nail ¥1980
 (内省的 SSW アルバムの傑作。99 作。ドイツ Blue Rose)
- *SHAWN SAHM: Shawn Sahn A
 (Doug Sahn の息子 Shawn の Doug Sahn そっくり? なソニマリの本作。すっ
 かりサー・ダグラス・クイント風なテキサス・メックスとハスキーで甘い Shawn の
 ヴォーカルは理想のテキサス音楽を体現。ゲスト: Doug Sahn, Augie Meyers, Flaco
 Jimenez。2002 作。伴リス Evangeline)
- *PONTY BONE: Fantasize A
 (テキサスのドクター・ジョンとでも言うか、縦揺れ、横揺れたつぷりリスミカル。
 Ponty のおおらかな太いヴォーカルもいい、いい。ようこそ! ミラクルな
 Ponty Bone のテキサス・メックス・ショーの世界へ。2002 作。Loudhouse)
- *DON WILLIAMS: Silver Turns To Gold A
 (いわば心の名曲集。SSWファン向けのいい唄ばかり。終始心和む。w. Sam
 Bush, Kenny Malone, Tim Williams, Charles Cochran, etc. 2002 作。
 RMG)
- *DON MICHAEL SAMPSON: Old Wood Bridge A
 (2 枚組 CD-R。あの "Americansongs" の Don の悠々自適の自主制作盤。

各種愛用ギターのアタックの強い巧みなギターを伴奏にした Don の唄は彼のキャリアがしっかりと熟成されたしたたかでしなやかなもの。

2001 作。Red Rose)

- *JEFF TARLTON:Astral Years a
(米国人 SSW だが資質は英国人 SSW 的。90 年代初めに故郷を離れ、録音時はベルリンでストリート・ミュージシャン。マンコリックで宇宙的音楽は Nick Drake や Tim Buckley を思い出させる。全 20 曲の長い旅。97 作。Delerium)
- *JEFF TARLTON:Drain Spring a
(前作の延長線上の 2 枚目。少し型にはまった分音楽的。やはり夢の異次元の世界へ。ベルリンでの録音。2000 作。Delerium)
- *TONY JOE WHITE:One Hot July A
(スワップな煮込み味。T. J. White ここに在り!2000 作。Hip-0)
- *ALAN GERBER:The Boogie Man(1999 作。Mugwamp) a
- *CALVIN RUSSELL:Crossroad B
(ギター弾き語りライブ。ごっつい唄が全 16 曲。“想い”が乗り移った粗いギターと“想い”がこぼれんばかりの入魂の唄に釘づけ。2000 作。Last Call)
- *CALVIN RUSSELL:Sam B
(テキサスのヴァンデラン SSW の 8 枚目。プロデューサーが James Luther Dickinson で、バックには Roger Hawkins, David Hood, Brenda Patterson の面々。ロングセラー。99 作。Last Call)
- *TOM ROZNOWSKI:Voice Beyond The Hill A
(T. Roznowski の温厚な人柄が滲み出た心優しい SSW アルバム。70 年代っぽい味と心あるカントリー・ロックが Tom の持ち味を最高に高めている。w. Jon Randall, Rob Ickles, James Talley, Brent Truit, Richard McLaurin, etc. おやじ感涙保証。2001 作。Blazing Stump)
- *HUNTER MOORE:Conversations B
(ナッシュヴィルの SSW。H. Moore の本作は Chris Donohue {ハース}, Phil Madeira {エレクトリック・ギター}、Steve Hindalong {ハークッション} の小編成ながらソリッドかつタイトなルーツ・ロック。Hunter の乾いた粗野なヴォーカルか何とも言えず魅力。2001 作。Brambus)
- *HUNTER MOORE:Delta Moon B
(その昔のベスト・セラー。やや南部寄りかつ繊細さも持ち合わせた本作は今聴いても新鮮。SSW 名盤。w. Kenny Malone, Bob Wray, Russ Pahl, etc. 96 作。Brambus)
- *JERRY JEFF WALKER:Mr. Bojungles C
(2 曲のボーナス・トラック付の計 12 曲入。68/93 作。Rhino)
- *TAJ MAHAL&THE HULA BLUES BAND:Hanapepe Dream B
(西アフリカのお次はハワイ!?Taj の渋いヴォーカルもバンドの音楽もユルユルで心地よいロール感があって、ご機嫌。Taj の各種ギターはもちろんのことウクレレやスティール・ギターも最高の響き。夢心地保証。2001 作。ドット&M)
- *MAIN STAGE LIVE “Falcon Ridge Folk Festival” A
(Kennedys, Dar Williams, Greg Brown, Richard Shindell, Nields, Patty Larkin, Peter Mulvey, Vance Gilbert and more。全 14 曲。99 作。Signature)
- *TOM MITCHELL:When The Moon Is Right ¥1000

(時折、Bob Carpenter をホフさせる世界をも垣間見せる。SSWファン静かなる衝撃作。96 作。Truesongs)

- *ELLIOTT MURPHY・IAIN MATTHEWS:La Terre Commune A
(異色のデュオ。それぞれの口の持ち味とデュエットがバランスよく収められた友情盤。2001 作。ドゥイツBlue Rose)
- *CHRIS SMITHER:Live As I'll Ever Be B
(何も言うことなし、C. Smither の持ち味そのままが発揮されたギター弾き語りライブ。録音は 96-99 年。全 16 曲。Hightone)
- *DAVID MUNYON:Acrylic Teepees B
(いつも夢想的で透明な D. Munyon の唄の世界。w. Al Perkins, Dave Pomeroy, Craig Krampf。珠玉の逸品。96 作。Glitterhouse)
- *DAVID MUNYON: Slim Possibility B
(ある種神聖とも形容できる D. Munyon 独特な唄の世界だ。非の打ち所のない潔癖さだ。理想の SSW アルバム。96 作。Stockfish))
- *JEB LOY NICHOLS:Just What Time It Is a
(ベアーズガイル録音の傑作“Lovers Knot”に次ぐ待望の New。しばし南部&トロピカル・フィーリングのある本作に夢心地…。知性と感性と職人ワザと三拍子揃った傑作。2000 作。Rough Trade)
- *JERRY JEFF WALKER:Night After Night D
- *BUTCH HANCOCK・JIMMIE DALE GILMORE:Two Roads a
- *MARK STUART:Songs From A Corner Stage(1999 作。Gearle) a

[CD/USA {female}]

- *STILLS & COLLINS:Everybody Knows B
(Stephen Stills と Judy Collins という予想もしなかった二人による本作は、ネット上で視聴したときの印象の数倍の良さで耳に飛び込んできた。ネットで聴いたときは、AOR 的な印象だったが、CD プレイヤーで聴く二人の唄とサウンドは、力を抜いた歌唱ながら、ヴォーカル・デュエットとして絶妙の味わいを醸し出していて、S. Stills のエレキギターはソフトだが、骨太く、全体の音はリラックスしつつ、つぼを得ていて、軽くロックしていて、何とも心地よい。おまけに Geroge Harrison の Handle With Care”, Tim Hardin の“Reason To Believe”, Dylan の「北国の少女」, Sandy Denny の“Who Knows Where The Time Goes”そして Leonard Cohen のアルバム・タイトル曲の“Everybody Knows”という感涙の選曲。ほろ酔い保証。2017 作。Wildflower)
- *BELA FLECK & ABIGAIL WASHBURN:Echo In The Valley B
(Bela と Abigail 夫妻の新作。どうしても革新的バンジョー奏者の Bela のバンジョー演奏に注目が集まるが、実は本作は Abigail の SSW としての魅力が花開いた感じで、女性 SSW アルバムとして、凜とした美しさを放っていて、心晴れやかな気分になる。もちろん Bela の予定調和的ではない身勝手に跳ね回るバンジョーのセンスも素晴らしいが、その自由な空気感のあるオールドタイミーなサウンドの中で、Abigail 彼女の軽やかな唄が実に良く映えていて、彼女の唄はまるで花園を自由に飛び回る蝶のよう。お二人さん、一緒に音楽を創るのを心から楽しんでいるようですね。お二

人のバンジョー・デュエットも心地よい。お二人だけにしか出来ない晴れやかな音楽。2017 作。Rounder)

*LAURA CORTESE & THE DANCE CARDS:California Calling A
(パークリー音楽大学卒業生で大学を拠点に活動しているというSSWでフィドル奏者のLaura Corteseと彼女のグループによる本作は、異色のルーツ・ミュージック・バンドとして注目を集めているという。本作から発つ彼女の資質は彼女が生まれ育った夢見る？サンフランシスコ～カリフォルニアの香り。フィドル、バンジョーなどが米国ルーツ志向の土臭いサウンドをベースに、甘くも尖ったサウンドとコーラスを付けて、ほんわか夢見心地なカリフォルニアン・ルーツロックを創作している。一見とらえどころのないような音楽だが、芯はアメリカン・ルーツで、生まれた音楽は彼女の個性が散りばめられたハッピー・サウンド・ミュージック。2017 作。Compass)

*CAROLIN NO:You & I B
(Carolin NoはCarolin & Andreas Obiegloのドイツの男女二人組だが、ほとんどが英語の自作曲で米国SSWタイプなのでここで。アコースティック・ギターやグロッケンシュピールなどの繊細極まりない産毛のようなサウンドの中、リード・ヴォーカルのCarolinの耳元でささやくような、ふわふわ風に揺れるような唄は、光[朝日？夕日？]まぶしいジャケット写真のようにふわふわ気分で夢見心地。相方のJames Taylorのような声のAndreasは同じ空気感の中で、優しくハモる。一曲目{タイトル曲}から絶品。2017 作。Fuego)

*THE LASSES & KATHRYN CLARE:Live at De Parel van Zuilen C
(オランダの女性フォーク・デュオ“Lasses”の新作は、米国の女性SSWのKathryn Clare{ヴォーカル、フィドル、ギター}を加えたトリオでの2016年のライヴ。三人の自作曲を中心に米国トラッドや英国のフォーク・シンガーのCyril Tawneyの曲等を収めた本作は、女性的に優艶でありかつ滋味豊か。聴くほどに心和む。2017 作。The Lasses)

*LAURA CANTRELL:Kitty Wells Dresses B
(Lauraの4枚目に当たる本作は、Lauraが子供の頃からのファンというカントリー・シンガーのKitty Wellsのカバー集。スティール・ギターを含めたカントリー・サウンドの全てがハワイ音楽のような清涼感があって、清々しい。2011 作。Shoeshine)

*BETSE ELLISE:High Moon Order A
(The Wildersのヴォーカル、フィドルのBetseのソロ。13曲中7曲が自作曲で3曲が伝統曲。彼女のフィドル演奏はマーク・スタイルのオールド・タイム・フィドルだそうで、僕の耳にはJohn Hartfordの女性版のように聞こえる。今の世の中にこんな音楽あり？！と思ってしまうほど、ホームメイドな古臭くて、飄々とした唄と音楽だ。2013 作。Tree Dirt)

*ALICE GERRARD:Bittersweet A
(かれこれ40年以上にわたって、アメリカン・ルーツ音楽の第一線で活動してきたAliceの10年ぶりの本作は、全曲自作曲の深い味わいのある素晴らしいSSW/フォーク・アルバム。体の中から湧き上がるようなリラックスした

唄は、いぶし銀のアメリカ・ルーツ・サウンドを伴って、ある時は心に沁み、またある時は心を和らげ、またある時は心をほがらかにさせる。いぶし銀のアメリカ・ルーツ音楽の名品だ。w. Laurie Lewis, Stuart Duncan, Bob Ickes, Bryan Sutton, Todd Phillips, Tom Rozum, etc.

2013 作。Sprouce And Maple Music)

*CATHRYN CRAIG & BRIAN WILLOUGHBY:Real World a

(ナッシュビル女性SSWのC. Craigとブリティッシュ・フォーク・グループのストロークスのギター奏者のBrian Willoughbyのデュオによる本作は、Brianの美しいブリティッシュ・フォーク・ギターとCathrynの大人のメルン調の穏やかな唄とが何とも心地よい“Real World”ではなく、“Dreamy World”。ずっと聴いていたい気分。2013 作。Gabritunes)

*ANNIE KEATING:Water Tower View a

(ひと味違う凝ったルーツ・ロックは本醸造ルーツ・ロック・ファンを唸らせる。こんなにセシスの良いかしたルーツ・ロックは滅多にお耳にかかれない。Annieの唄は、セシス抜群の大人のルーツ・ロック・サウンドと共に心と体に美味しい。w. Bo Ramsey, Jason Mercer, Chris Benelli, Chris Tarrow, John Caban, etc. 2010 作。

Annie Keating)

*COSY SHERIDAN:The Horse King a

(ウエテラン女性SSWのCosyの本作はひと味違う。様々なサウンドを創り出すアコースティック・ギターの妙技に驚かせられながら、Cosyの唄の世界へとご機嫌に誘われてゆく。音楽性の基本はGood & Old Timeなアメリカ・ミュージック。巧みなワザに裏打ちされた音楽は豊かで柔らか。心晴れ晴れする爽快なSSWアルバムだ。w. David Surette, Kent Allyn, Penny Nichols, TR Ritchie。2011 作。Waterbug)

*CAROLINE HERRING:Camilla A

(Carolineの音楽性はフォーク/ルーツ・ロック系だが、その中身は自分の物語を含めて、アメリカの物語。Lucinda Williams級。ゲスト:Jackie Oates, Mary Chapin Carpenter, Aoife O'Donovan, Kathryn Roberts。最後の曲はパート・ハーツの「蛍の光」だが、Carolineは自作のメロディに乗せてうたっている。2012 作。Signature Sound)

*JANIVA MAGNESS:Stronger For It A

(Janivaの渾身の唄とバンドの南部ロックが、ガツと組み合って、感動の嵐。2012 作。Alligator)

*FRED JAMES & MARY-ANN BRANDON:We Belong Together a

(ナッシュビルのウエテランSSW&ギタリストのFred Jamesとナッシュビルのスワンプ・クインのMary-Annの共演盤。FredのSSW的資質とMary-Annの南部ブルース&R&B資質のぶつかり合いはFredがMary-Annの大きな土俵の上で、自身のエレキギターを含め、ガツあるウエテランで精一杯対抗する風ながら、Fredは+αの南部っぽい底力を見せ付けている。Mary-Annのウエテランは豊潤なウエテランで聴き手を圧倒する。2011 作。ド・イツSPV)

*WHEN OCTOBER GOES(1991 作。Philo) A

*NANCI GRIFFITH:Little Love Affairs(1988 作。MCA) A

*NANCI GRIFFITH:Flyer(1994 作。Elektra) A

*REBECCA PRONSKY:Viewfinder A

(ブルックリンの女性SSWのRebeccaの唄は独特。音楽的にはGillian

Welch や Eilen Jewell のような古いルーツ・フォークやルーツ・ロック的な志向性を持ちつつ、トワリング・ギターの多用に加え、声が豊かで、夢想的で朗々としたヴォーカルなど、彼女独特な唄世界を創作している。都会のビルの一室で、夢想しているかのような音楽。2011 作。Nine Mile)

- *LIZ MEYER: The Storm A
(カントリー・フォークの女王 Liz の本作は昔からの音楽仲間や中堅音楽家の協力を得て実現した夢に描いてきた同窓会音楽。Bela Fleck, Emmylou Harris, Jerry Douglas, Sam Bush, Stuart Duncan, Rob Ickes, Byron House, Glen Duncan, Ron Block, Kenny Malone 他。2005 作。オランダ Strictly Country)
- *CARRIE RODRIGUEZ: She Ain't Me A
(Chip Taylor とデュオを組んでいた Carrie の二枚目。本作でデュエットする Lucinda Williams 級。2009 作。Continental Song City)
- *KRISTA DETOR: Chocolate Paper Suites a
(前二作同様、プロデュースは David Weber で、そしてまた前作同様、自身が奏でるピアノの響きが印象的で、時空を超えて、Krista が創作する穏やかで、深く心地よい唄の世界へと運ぶ。Chris Wood, Karine Polwart, Emily Smith, Maura Smiley, Rachel McShane, Malcolm Dalglish, etc. 2010 作。GoraZong)
- *RACHEL HARRINGTON: The Bootlegge's Daughter A
(2008 年作の "City Of Refuge" が好評の Rachel の 2007 年作のデビュー作。Rachel の唄を包む空気は百年前のアメリカ西部、或いはアパラチアだったり、今日のルーツ・ロック風だったり、また今日の田舎の SSW 風だったりする。2007 作。Skinnydennis)
- *LINDA HARGROVE: One Woman's Life A
(カントリー・フォーク系のヴァンダ・ラングの Linda の本作はヴォーカルも音作りもヴァンダの風格漂う Great な SSW アルバム。名うての楽士達のバックアップが見事。Linda の揺るぎ無い唄に相応しい演奏で支える楽士は Sam Bush, Kenny Malone, Jeff Davis, Dennis Burnside, Pam Rose, Hoot Hester, etc. 2005 作。Panacea Productions)
- *KATE McDONNELL: Where The Mangoes Are B
(Kate の本作が 4 枚目。Kate ならではの壊れそうで逞しい唄たちだ。Kate は今を唄う吟遊詩人。2005 作。Appleseed)
- *SUZANNA SPRING: She's Got Your Heart A
(本作は敏腕プレイヤーによる奥深くもピリッとカッコいいルーツ・ロックの見事さ中で女性ならではの哀愁や感傷や夢想等の感情が実にいい感じで美味な唄として結実している。カッコいい音の波に乗ってる、って感じだ。2003 作。Suzanna Spring)
- *CLARE MULDAUR: Bentley Circle ¥700
(Geoff&Maria の娘 Clare の 2 枚目。Clare の夢見るような素朴な唄の数々とこれまた夢見るような素朴なギター、チャリンコ、マンドリン等の伴奏の音色の心地よさは憎いほどの素敵さ。2003 作。Clare Muldaur)
- *WENDY BECKERMAN: Mango Moon A
(Jack Hardy おかかえのミュージシャンがバックを固めた Wendy の 3 枚目の 96 年作。Wendy の持ち味がシンプルにリカルに表出。唄の自由さと彩りのある素敵な女性 SSW アルバム。Brambus)

- *FLORAMAY HOLLIDAY:Floramay Holliday B
 (南カリフォルニアの女性SSW。Kelly Willisと比較されることの多いSSWだが、Floramayの方がロック的で南部志向。エレクトリックを内にキープした本格的なフォークをテキサスのウエスタン達が本醸造ロックでサポート。w. Lloyd Maines, John Inmon, Gene Elders, etc. 98作。Roseneath Music)
- *ROSALIE SORRELS:No Closing Chord a
 (Malvina Reynoldsソング集。w. Bonnie Raitt, Laurie Lewis, Nina Gerber, Barbara Higbie, etc. 2000作。Red House)
- *PEGGY SEEGER:Love Will...Linger On... a
 (副題“Romantic Love Songs”。子守唄のように夢心地な唄達。w. Colum&Nei MacColl, Irene Scott, etc. 2000作。Appleseed)
- *KIM RICHEY:Bitter Sweet(97作。Mercury) A
- *MARIA MULDAUR:Meet Me At Midnite(1994作。Black Top) A

[DVD/CANADA] PAL 2

※PAL専用DVDプレーヤー/パソコンで再生可能

- *NEIL YOUNG:Heart Of Gold D
 (2枚組。ディスク1はドキュメンタリー+ライブ1曲で、ディスク2は2005年ナッシュビルでのライブ。全19曲。w. Emmylou Harris, Ben Keith, Spooner Oldham, Karl Himmel, Chad Cromwell, etc. ディスク2のライブは一曲一曲が聴き所、見所。2005年。オランダ。Shangri-la)

[DVD/CANADA] NTSC all regions

※国内製DVDプレーヤーで再生可能

- *LEONARD COHEN:Under Review 1978 - 2006 B
 (カナダを代表するSSWのL. Cohenの多数の希少ライブ映像を含む貴重映像と写真を挟みながら John Simon, John Lissauer, David Cohen等 L. Cohenのプロデューサーやジャーナリストがアルバムを追いながら彼の音楽を語るドキュメンタリー-DVD。64分。2008作。Sexy International)
- *RONNIE HAWKINS:Still Alive And Kickin' B
 (The Bandの前身The Hawksのリーダーでカナダのロック界のホースのRonnie HawkinsのHawks時代の貴重ライブ映像や今日のバンドのライブを挟みながら、癌の手術そして快復等 R. Hawkinsの普段着の姿と音楽人生が記録されたDVD。Robbie Robertson, Kris Kristofferson, クリントン大統領が R. Hawkinsを語る。約90分。2004作。CTV)

[LP/CANADA]

- *BLACKIE & THE RODEO KING:Kings And Kings ¥3090
 (LP。Colin Linden, Stephen Fearing, Tom Wilsonの“Blackie...”の新作は、Nick Lowe, Buddy Miller, Rodney Crowell, Vince Gill, Jason Isbell, Keb Moなどのただ者ならぬシンガーをゲストに迎えて、制作されたただ者ではないアメリカン・ロック。それはロック魂とロック魂のぶつかり合い、例えばThe Band+ただ者ならぬシンガーくらいの真剣勝負さと重厚さがあって、そうかそうか、“Kings & Kings”というタイトルはその意気込みを表しているのか、70年代アメリカン・ロック回帰?の金字塔的力作で名作。音が

美味しい! Produced by Colin Linden. 2017 作。FU:M)

[CD/CANADA]

- *WAILIN' JENNYS:Fifteen B
(Ruth Moody と Heather Masse は素晴らしい SSW アルバムを出している Wailin' Jennys の 15 周年のアルバム。デビュー当初、彼女等の本格的なアメリカン・ルーツ・ミュージック志向の音楽性にノックアウトさせられたが、本作で聴ける彼女達の音楽は、気分新たに心静かにアメリカの心ある SSW 達 {Emmylou Harris, Jane Siberry, Paul Simon, Patty Griffin, Warren Zevon, Tom Petty, Dolly Parton, Hank Williams} の唄をうたったもの。三重の歌声はアメリカン・ルーツ・ミュージックの土臭さや泥臭さをほのかに放つ歌声で、抜群の旨みを醸し出している。必要最小限に抑えられた古びたアメリカン・サウンドがまた味わいを深めてもいる。いぶし銀の唄たちだ。全体に漂う静けさは彼女等の新たな旅立ちを予感させる。2017 作。True North)
- *FRED EAGLESMITH:Standard A
(愛すべきカナダのヴェテラン SSW の Fred Eaglesmith の愛すべき新作。バンド編成だが、Fred の心はギターを弾き語りしていた時代に初心回帰するように、一心に声をふり絞る。それらの唄は、Roger McGuinn や Willie P. Bennett や Chip Taylor などの唄とイメージが重なる。デジタル音とは無縁な粗いルーツロック・サウンドが、彼の不器用に古いスタイルのままの泥臭くルーズなヴォーカルにバッチリ合っていて、ひとつひとつの唄が心にぐさり。「泥臭くルーズ」だが、唄に一匹老狼 SSW としての魂が宿っている。2016 録音の 2017 作。Fred Eaglesmith)
- *BLUE RODEO:1000 Arms B
(1984 年結成のカナダのヴェテラン・カントリー・ロック・バンドの Blue Rodeo の新作は、西海岸カントリー・ロックの王道を突き進む信じられないほど爽快なカントリー・ロック。現在のメンバーは Greg Keelor {ヴォーカル、ギター}、Jim Cuddy {ヴォーカル、ギター}、Bazil {ベース} のオリジナル・メンバーに Glenn Milchem {ドラムス}、Michael Boguski {キーボード}、Colin Cripps {ギター、ヴォーカル} の六太郎。Poco と Byrds の美味しいところを清々しく受け継いでいて、感涙。彼ら、音楽で青春してますね。2016 作。TeleSoul)
- *BLACKIE AND THE RODEO KINGS:South A
(Stephen Fearing, Colin Linden, Tom Wilson, John Dymond, Gary Craig の Blackie&The Rodeo の 2014 年のアルバム。フォーク系の S. Fearing, カントリー&南部系の T. Wilson, 南部系の C. Linden のそれぞれの SSW がこのバンドのために自作曲を持ち寄って、それぞれの個性を活かした年季の入ったルーツロックを創作しているのだが、特に Willie P の資質に似た持ち味の T. Wilson と南部志向の C. Linden の二人がリード・ヴォーカルを担う曲の土臭さや泥臭さは、Willie P+α の味わいを醸し出していて、圧巻。2014 作。FU:M)
- *BLACKIE&THE RODEO KING:High Or Hurtin' B

(Stephen Fearing, Colin Linden, Tom Wilson から成る "Blackie" の 1996 作。True North)

*STEPHEN FEARING: That's How I Walk B
(最強の SSW, S. Fearing の New は、朋友 Colin Linden の強力応援を得、Stephen の感性鋭いシャープな唄が、より深みと味わいをもって心に突き刺さる。w. Colin Linden, Richard Bell, Shawn Colvin, Jonelle Mosser, Ben Riley, etc. 2002 作。True North)

*RICHARD NEVILLE: Old Souls a
(Richard Neville はカナダ東部のラブラドル半島の SSW。ラブラドル半島の人々や文化に触発された自作の唄の数々は、ほっこりしていて、古くからの友の唄を聴くように体にしみわたる。例えば、田舎暮らしをしていて、穏やかになった Gordon Lightfoot のようなメロディの唄。自身のギターの弾き語り+軽やかなカントリー・ロック風サウンドは、彼の温厚な唄とともに何とも心地よい。SingSong)

*BONNIE DOBSON: Take Me For A Walk In The Morning Dew a
(Bonnie Dobson の 2014 作。録音は英国のロンドン。Her Boys と名付けたグループ [B. J. Cole もメンバー] を伴って制作された本作は、衰えを知らぬ歌声と決して懐古趣味的ではないリットなアコースティック・フォーク～フォーク・ロックに現在進行形の今の Bonnie の音楽が瑞々しく表出されている。12 曲目の "Sandy Boys" などは Fairport みたいな気力充実のフォーク・ロック。2014 作。Hornbeam)

*IAN TAMBLYN: Side By Each B
(海の生き物に心を寄せ、旅の思い出を回想する Ian の心の唄は、本作において、一段と穏やか。ギターの美しい響きなど、ふと "High Winds White Sky" の頃の Bruce Cockburn を思い出した。w. Rebecca Campbell [彼女のほわっとしたハーモニー・ヴォーカルは Ian の音楽に欠かせなくなっている], Fred Guignon, Pat Maher. 2013 作。North Track)

*IAN TAMBLYN: Gyre B
(「四つの海岸プロジェクト」は一休み。地球を旅する Ian のその感動の瞬間の心情が一枚の印象的な風景写真のように詩的に詠まれ、うたわれている。本作は W. G. Tamblyn [1923-2009], Willie P. Bennett [1951-2008], M/S Explorer [1968-2007] の霊に捧げられている。評価する隙を与えない名作。2009 作。North Track)

*IAN TAMBLYN: Superior - Spirit And Light B
(本作は四つの海岸プロジェクトの 1 作目で、I. Tamblyn が育ったところであり、音楽の旅のスタート地のスペリオル湖と北西オタワに焦点を当てたもの。本作は青春時代を過ごした湖の生活に想いを馳せ、心遊ばせた唄たちが収められている。煌くギターの演奏ほか生まれた音楽は細心の音作りが成され、Ian のまさに "Spirit and Light" に象徴される魂が乗り移った唄はかつてなくとも言っても過言ではない程彼らしいヒューマニティーと詩情を高めている。2007 作。North Track)

*IAN TAMBLYN: Angel's Share B
(Ian Tamblyn らしい素晴らしいアルバム。旅する SSW の Ian の目に映る世界はどれも霊的なほど美しく神秘的に輝いている。感動的な風景や旅の出来事の詩的描写の見事さは本作においてもなお

絶品。w. Rodney Brown, Rebecca Campbell, Ken Kanwisher, Fred Guignion, etc. 2004 作。North Track)

- *JENN GRANT: The Beautiful Wild A
(カナダの女性 SSW, Jenn の 4 枚目。米国の女性 SSW の Meg Christian のよ
うなゆったりと漂うような唄なのだが、Jenn は深いポップ・ロック・サ
ウンド効果もあって、奥が深い。またイントロ・クォンから始まり、Neil
Young の「孤独の旅路」っぽい 2 曲目から夢の旅路へと誘って、ラストの
12 曲目、子ども達の唄で終わったかと思っていると、しばらくして
Jenn のピアノの弾き語りという展開は長い夢の唄の旅をした気分
にさせる。プロデュースは Daniel Ledwell。2013 作。Blue Rose)
- *AMELIA CURRAN: Spectators A
(Amelia は絶望や寂しさの中から光を求めるような唄が多く、唄か
ら漂う雰囲気は Natalie Merchant を想起させる。闇の中で「キラ」の
素敵な唄たちだ。どこかで 70 年代 SSW のスピリットを引きずっている感
じだ。ゲスト: Oh Susanna。2013 作。Blue Rose)
- *OLD MAN LUEDECKE: Tender Is The Night A
(ここ数年で最高にお気に入りのカナダの SSW。この自ら「老人」と名
づけたパソビョー弾き SSW のおっさんが住む世界は、唄の世界も音楽
的にも田舎っぽい、同時に夢のような世界。その夢のような世
界がもう最高。なぜか Tim O'Brien がプロデュースをやっていて、様々
な楽器と唄で、まるで長年の相棒のようにわきあいあいと共演し
ている。本当に魅力的な SSW だ。2012 作。True North)
- *DAVID FRANCEY: Live From Folk Alley A
(2005 年 11 月、Kent State Folk Festival でのライブ。伴奏は Shane
Simpson のギターのみ。David の唄の世界は流れる風景や絵本を眺め
ているように映像的だ。最後から 2 曲目の“Morning Train”は、キス
ト、ブグダ、アラーと駅や列車内で出会う唄だ。最後に出会うのは悪魔。
発想が面白く、実に面白い唄だ。全曲訳詩が欲しいところ。素晴ら
しい唄と一緒にフェイスの空気も味わって欲しい。2012 作。Greentrax)
- *MURRAY McLAUCHLAN: Swinging On A Star (1988 作。カナダ EMI) B
- *MURRAY McLAUCHLAN: The Songbook... New Arrivals a
(M. McLauchlan の本作は“Eddie”というミュージカルの為に Murray が作詞
作曲した 14 曲入。Murray の唄は古いジャズやフォーク・ソングを唄うよ
うにソフトでスルリッで粋なサウンドにのってうたう Murray の唄は気
持ちいい。2006 作。EMI)
- *RAY BONNEVILLE: Bad Man's Blood a
(南部ロック志向 SSW の R. Bonneville の新作は南部魂を内にしっかりと
込めた泥臭い南部志向音楽。好きものには贅沢な料理だ。噛むごと
に舌鼓保証。Ray の最高傑作。2011 作。Red House)
- *WAYNE ROSTAD: Storyteller (1991 作。Stag Creek) C
- *DAVID WIFFEN: South Of Somewhere (1999 作。True North) C
- *MAE MOORE: Folklore A
(カナダの自然や大地の自然現象や風景を入口に夢物語の世界へと誘
うカナダ人のセンスが微細に発揮された見事な女性 SSW アルバムだ。Mae の
唄はどの唄も自然や大地を描いた不思議な絵のよう。すぐにイメージ
するのはやはり Joni Mitchell。Mae の音楽性は丁度 Joni Mitchell

の初期からジャズっぽい“Court And Spark”までの幅でキラリと光るサウンドと唄とで魅了する。カナダのSSWの感性が光る名盤だ。2010作。
Poetical)

- *DEVON SPROULE:Don't Hurry For Heaven! A
(カナダ生まれの米国ヴァージニア州の100人のコミュニティで育ったDevonの本
作は60年代~70年代ロックの感触の諧謔的音楽を含め子悪魔的魅力
全開。2010作。Black Hen Music)
- *DEVON SPROULE:Upstate Songs A
(2003年作。アコースティック演奏による軽やかにひるがえるヴァーカルの少女
っぽさと新鮮さそして夢見心地さはすこぶる魅力。胸キュン。2003作。
Tin Angel)
- *JOHN WORT HANNAM:Queen's Hotel A
(本作が四枚目というカナダのSSWのJ. W. Hannamの第一印象はRodney
Brown。ヴァーカルの質も似ているが、Rodneyのようにマイペースで、温厚
で、どこか爽やかな風が吹いているような感じも似ている。違うの
はこちらの方がやや渋めというか、一歩引いた大人の哀感も感じ
られることだろうか。さりげなさがとても快い良質のSSWアルバムだ。
w. Steve Dawson, John Reischman, Jenny Whiteley, etc. 2009作。
Black Hen Music)
- *COLIN LINDEN:Sad&Beautiful World 1975-1999 A
(The Band系南部ロックに深く傾倒するC. Lindenの初期音源中心の18
曲入編集CD。2004作。True North)
- *GREAT LAKE SWIMMERS:Lost Channels a
(カントリー・ロック・ファン大推薦。かれらの音楽は70年代ロックに夢のヴァールを掛
けた感じで、70年代ロック・ファンの弱い部分をくすぐる夢の音世界を創
作し切っている。天下一品。2009作。イギリスNetzwerk)
- *FRED EAGLESMITH:Dusty A
(Fredの本作は何と言うか鎮魂歌のように物悲しく緩やかに流れ
てく。祈るようなFredのヴァーカルはじわりじわりと感動的。Scott
MerrittのプロデュースはこれまでのFredのルーツ・ロック的音作りとは一
線を画した自由な発想による唄のイメージに即したもの。絶品!
Major Label)
- *VEDA HILLE:This Riot Life A
(通算12枚目になる個性的SSWのVedaの本作は不思議音楽。ピアノで音
遊びしながら生まれたような彼女の唄は独り夢の中を旅する感覚
の音楽。2008作。Ape House)
- *VALDY & GARY FJELLGARD:Still In The Running A
(副題“Contenders Two”。まさかの二人の嬉しい2枚目。齢を重ねた
じいさんSSWお二人の温かな唄達。昔っから好きなValdyのヴァーカル
は相変わらず。Ian Tamblynの“Bay Of Sails”やJohn Prineの
“Speed Of The Sound Of Loneliness”やMicky Newburyの“Them
Old Snogs”等二人それぞれがヴァーカル&デュエットで人なつっこそうな
唄を二人の活きの良いギターとマンドリンの伴奏でうたう。ヒューマン・ソング・
ファン、心あったか保証。2007作。Stony Plain)
- *TIM WILLIAMS:Songster, Musicianer, Music Physicianer A
(ホートルネック・ギター等ブルース・ギターを弾き年季の入ったブルースやブルース風自

- 作曲を悠々とうたう。長年活動を共にしているバンドが数曲で共演してはいるが、バンドのヴォーカル&ギターとしての印象よりブルース・タイプのSSW的なコのある味わい。一匹狼の風格。2007作。Gayuse Music)
- *EILEEN McGANN: Beyond The Storm (Dragonwing) A
- *JANE SIBERRY: Shushan The Palace A
(カナダの女性SSWのJaneの本作は副題“Hymns of Earth”のクリスマス時期にあわせて制作された主に数世紀前のヘンデルやバッハ作曲曲を含む聖歌集。Janeならではの優美な聖歌の世界。2003作。Sheeba)
- *ENNIS SISTERS: Christmas B
(ニューファンドランドの美人3姉妹による美しいクリスマス・アルバム。トラッド色も無いことも無いが、彼女等本来のフォーク〜カントリーなサウンドの姉妹の美声が活かされたフレッシュなクリスマス・アルバム。新年を祝うダンスブルな楽しい唄で幕。これはケープ・ブレント・トラッド色濃厚なトラッド・ロック。2002作。Warner)
- *TIM HARRISON: Tim Harrison ¥1000
(名作79年作“Train Goin’ East”と85年作“In the Barroom Light”からの10曲を新たに録音したもの。99作。Second Avenue Songs)
- *KENNY BUTTERILL: Just A Songwriter B
(米国在住カナダ人SSW、Kennyの本作はバック&ゲスト{Willie P. Bennett, Ray Bonneville, Norton Buffalo, Joe Weed, Larry Hosford, Mary McCaslin, etc.}もばっちり固めたJ. J. Gale風似込み味SSWアルバム。2003作。No Bull Songs)
- *RAY MATERICK: Rockin’ The El Mocambo 82 a
(CD-R。“El Macambo Tavern”での82年の重厚ライブ。ギター、ベース、ドラムス、チェロ、サクソによるバックはトースト重戦車のパワー。Rayのヴォーカルは火の玉。スローもアップテンポも手に汗握る入魂のロック。2002作。KingKong)
- *RAY MATERICK: Ashes And Dust a
(CD-R。最も音作りばっちりの僕等が知る70年代のRay風。ベース奏者が懐かしいTim Drummond。Rayのしゃがれ声の唄とがっちり噛み合うタイトな70年代風ロック。すべてが理想のSSWアルバム。Steve Smithのスティール・ギターもMichael FanferraのオルガンもLisa Winn&Bob Lamotheのバック・ヴォーカルもいい味わいだ。抜群！2001作。King Kong)
- *SCHULD&STAMER: You Got The Bread... We Got The Jam a
(Stamerが全面的にヴォーカル。もうロックのJ. B. Lenoir作“Voodoo Music”からStamerの泥つとしたブルース・マジックの世界へ引きづり込まれる。ゲストのLong John Baldryもヴォーカルで4曲飛び入り。生きたブルース。絶句。98作。Blue Streak)
- *SHANNON LYON: Tales Of A Yellow Heart A
(2000年作“Summer Blonde”が人気だったS. Lyonの97年作。まるでNeil Young with Crazy Horse。粗削りな70年代風ロック。97作。Swallow)
- *KATHY PHIPPARD: Outside Lookin’ In B
(ニューファンドランドの個性派女性SSWのデビュー作。ピアノの弾き語りを中心に感情の起伏の大きな唄達は魅力。極めてカナダのSSW的個性。音作りも七変化。98作。Candle View)

- *TAMMY FASSAERT: Corner Of My Eye A
 (ウアンカーパ-島村侑出身のさわやかな女性 SSWアルバム。ブルグラスとフォークがアコースティックに気持ちよくブレンド。彼女の濁りのなさは貴重。2000作。Tam Can)
- *THE SWALLOWS: Turning Blue A
 (Blue Rodeo の Glenn Milchem が The Swallows という名で作ったデビュー。70年代ブリティッシュ・フォーク〜ロック的香り漂う不思議ロック。ジャケットもサイケ調。2000作。Magnetic Angel)
- *TONY KOSINEC: Almost Pretty A
 (T. Kosinec の 79 作の 4 枚目。2000 作。Vivid)
- *SNEEZY WATERS: A Letter Home B
 (テキサス・ミュージックやブルースをベースにした雑食性に富むルーツ・ロック。Sneezyらしい個性が盛り込まれている。ウエスタンスタイルの風格。97 作。Watershed)
- *GORDON LIGHTFOOT: A Painter Passing Through a
 (G. Lightfoot の本作は、清々しくもある種枯淡の境地。w. Daniel Lanois, Willie P. Bennett, Barry Keane, Terry Clements, etc. 98 作。Reprise)
- *FRANCESCA: Au-Dela Des Couleurs B
 (フランス語、スペイン語、イタリア語、英語でつぶやくように、また情熱的に唄う地中海ムードの女性 SSWアルバム。かなりの本格派だ。99 作。BMG)